おきなわ・海歩き　第８回

マングローブの森

鹿谷麻夕（しかたに・まゆ）

沖縄や東南アジアなどの暖かい地域では、大きな川の河口など、海水と淡水が混ざり合う泥干潟にマングローブ林が広がります（写真1)。マングローブとは、こうした場所で見られる植物の総称で、いくつかの種類の木々が集まってマングローブの森になり、これが陸上では見ることのできない、なかなかユニークな生態系を作っています。

写真１　市街地の河口に広がるマングローブ

まず、マングローブ植物の育つ場所は、地面がとても柔らかい泥です。私達がうっかり足を踏み入れると、場所によってはズブッと足首が埋まり、時には膝から腰近くまで泥にはまってとても歩けません。見た目は堅そうでも、歩くときは一歩一歩、気をつけなければなりません。それから、潮の干満があります。潮が満ちてくると辺りは一面水浸し。木々が海の中に立っている景色になります。まだ小さい幼木などは完全に水の中に沈んで、水中の森の間を海の魚が泳ぎ回ります。海だか陸だか分からないような場所ですね。

さて、沖縄島で見られるマングローブ植物の代表は、ヒルギの仲間。メヒルギ、オヒルギ､そしてヤエヤマヒルギ（写真 2）の 3 種類。それぞれ葉や根の形が違います。最も多いのはメヒルギ。葉の先が丸く､根は板のよう(板根)。オヒルギは葉の先がとがり、赤い花がきれいです。根は空気を求めて、膝を曲げたような形（膝根（しっこん））で木の周囲の地面からにょ

写真２　タコの足のようなヤエヤマヒルギ

きっと出ます。ヤエヤマヒルギはとがった葉の先に針が付いているのと、タコの足のような根（支柱根）が幹の途中から出るので一目で分かるでしょう。

普通の植物は、海水に浸かると生きていられません。でもこれらの木は、根や木の表面から塩が入らないようになっていたり、体に取り込まれた余計な塩分を古い葉にためて落とすので、海の中でも大丈夫。試しに黄色くなった葉っぱを少しちぎってなめてみましょう……塩味がするかな？

ヒルギの仲間は、種も変わっています。なんと木に実がなったままで、種から芽が出てしまうのです。細くてつるっとしたキュウリのよう部分は、種から伸びた茎と根（写真 3）。二葉は実の中に隠れています。実から栄養をもらってどんどん育った「苗」は、やがて実からはずれてぽとりと落ち、泥に突き刺さって枝を伸ばしたり、潮の流れに乗って遠くに運ばれ、新しい土地で育っていきます。ヒルギという言葉は「漂木」、つまり漂流する木という意味なのですね。

さて、マングローブの森は川が運んでくる栄養を吸って育ち、森の中でたくさんの葉が落ちて腐ることで、干潟の泥と水に豊富な栄養を与えます。これを求めて、多くの生き物達がここで暮らしています。ではどんな生き物がいるのか、マングローブの根元に目をやってみましょう。泥っぽい水溜まりをよく見ると、びっくりするくらい大きな二枚貝がごろんと転がっています。シレナシジミです（写真 4）。シジミというのに直径が 15 センチもあって、とてもお汁のお椀には入らない！　数が少なくなっているので、採らずに残しておきましょう。貝殻の割に身は小さいし、食べても泥っぽいのではないかな。この貝はマングローブの栄養たっぷりな泥水を

写真３　メヒルギの「苗」：胎生種子といいます

写真４　シレナシジミ

吸い込んで、有機物をこし取って食べる、生きたろ過装置なのですから。

ヒルギなどの落ち葉をむしゃむしゃと直接食べる動物もいます。キバウミニナという角のような形の大きな巻貝は西表島で見られます。ミナミアシハラガニも、巣穴に引っ張り込んだ落ち葉をハサミでちぎって器用に食べています。彼らは、落ち葉が分解されるのを早める役割をもっています。

マングローブや泥干潟で一番目につくのは、何と言ってもカニの仲間でしょう。中でも巨大なのはノコギリガザミ。マングローブの根元の大きな巣穴に住んでいて、甲羅のへりがノコギリのようにギザギザです。美味ですが、とても強くて太いハサミには要注意。また、干潟の表面には小さな穴が無数にあって、小ガニがたくさん動き回っているのが見えるでしょう。ひらっひらっと白いハサミをバンザイするように振りながら、ちまちまと泥をつまんでいるのはツノメチゴガニ（写真 5)。甲羅が１センチもないほどの大きさで、名前の通り、目の上にまつ毛のようなツノが生えています。もう少し体が大きくて、片方のハサミが立派なのはシオマネキ類のオス。これもたくさんいます。でも私達が近付くと、あっという間に泥の穴に隠れ、見事に１匹も見えなくなります。そういうときは、ちょっとがまんして数分間、じっと身動きを止めて下さい。やがてまた、穴の中からそうっと出て来ます。カニの観察は、我慢比べのようなもの。私達が急に体を動かすと、彼らはとても驚いてまた穴に入ってしまいます。自分が一本のマングローブになった気持ちで泥の上でじっとしていれば、生き物達は安心してきっと色々な姿を見せてくれることでしょう。

写真 5　ツノメチゴガニ